『芦田譲治先生追悼文集』 昭和 57(1982) 年 12 月 25 日。

自治会事始

昭和二十八年の宇治分校は、ただひたすらに細長く、草深く、非文化的で、「まるで毎日遠足しているみたい」に草臥れた。

当時は未だ食糧事情も悪く、月十五日分位の配給米の代わりにもらう外食券が要ったが、外食券だけでは食事ができる訳のものでもなかったので、外食券が屡々取引の対象になった。確か一枚二円位ではなかったかと思う。

当時我々がよく利用したのは、二十七円の定食であったが、これは御飯に天粕の入った味噌汁、それに生干しのサンマの焼いたのと漬物、というのがキマリであった。これに二円を足すと丼に味噌汁を入れて呉れた。その外には葱しか入っていない「すうどん」が十円、カレーライスが二十五円であった。

随分食意地の張った奴と思われるかも知れないが、当時の我々にとっては、勉強と同時に食べることも、重大な関心事だったのである。

そうこうしているうちに、「生協の米飯が不味い、諸君断乎抗議して美味い飯を喰べられるようにしよう」という趣旨のビラが貼り出された。これには早速反響があった。かなりの数の学生が生協に抗議に行ったのである。

学生生活を擁護していると自負していた生協の理事は随分面喰ったようであるが、事情を察して改善を約束、学生達も納得して引揚げた。この時早速馳せ参じてあちこち走りまわった学生達を中心にして、宇治分校の自治会が誕生したのは、それから間もなくの事であった。

後で判ったことであるが、これは I 君、H 君、それに T 君等が仕掛けたものであって、目的は高校で活動していた者を集める為だったという。智恵者というのは、どこにでもいるものではある。

結成された自治会は、すぐに忙しくなった。二十六年「天皇事件」で解散させられた同学会の再建のための全学投票に向けて、宣伝を開始したからである。大学側は半数以上の有効票は無理とみて、再建の条件に全学投票を提案して来たそ

うな、ということが、ある危機感をもって語られ、自治会の委員達は必死になってクラス討議を組織した。結果は予想をはるかに超える四千五百の賛成をもって、同学会の再建がみとめられることになる。

宇治分校でも、同学会の選挙のためのポスターがあちこちに貼りめぐらされた。選挙は参議院選挙に倣って全学区と学部区の二本建てであったが、自治会の委員の大部分がそのどちらかに立候補することになった。

このポスターのいくつかには、公然と「日本共産党公認」の文字の入ったものがあった。結成されたばかりの宇治分校自治会からも委員だったT君、I君、M君が、公認候補として立候補した。朝鮮戦争の終結の年であり、未だレッド・パージの記憶も生々しい当時、「共産党公認」の文字は、我々新入生に大学の自由な雰囲気を実感させる、或種の鮮烈な印象を与えたように記憶している。しかも新聞で読むだけではない、党員の実物がそこらを歩きまわっていたのであるから。

……

こう書きながら当時を想い出してみると、たとえば自治会のアクチヴなメンバーで、仏教の信者であったS君のように、思想的には色々な立場があったが、互の立場を尊重するという、リベラルな気風は未だ濃厚であった。これは一つには当時は未だスターリンが健在であって、社会主義に対する深刻な疑問が未だ存在しなかった事によるものであったろう。思えば幸福な時代であった。

山口 巖　昭和二十八年入学・京都大学教養部助教授

『古代ロシア研究』 第15号 (泉井久之助・菱山忍両先生追悼号)　1983年9月15日。

菱山忍先生の御逝去を哭す

昭和56年4月22日、本会の創立に力を盡された菱山忍先生が逝去された。ここに謹んで先生の御冥福を祈る次第である。